



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小規模ワイナリーの観光戦略：北海道・仁木町および余市町のワインツーリズムの事例
Author(s)	三浦, タ佳
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第16812号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16812
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99657
Type	doctoral thesis
File Information	MIURA_Yuka_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：三 浦 タ 佳

審査委員	主 査	准教授	小 泉 大 輔
	副 査	教 授	岡 本 亮 輔
	副 査	准教授	石 黒 侑 介

学位論文題名

小規模ワイナリーの観光戦略

——北海道・仁木町および余市町のワインツーリズムの事例——

本論文は、北海道・仁木町および余市町の「小規模ワイナリー」を対象に、ワインツーリズムが組織される過程、ホスト／ゲスト関係のもとで「観光」と「労働」の境界がどのように引かれ、ワイン生産現場の場所性がいかに資源化されるのかを検討する。構成は第1章～第6章と結論からなる。

第1章では、田園回帰や農村観光をめぐる先行研究を整理しつつ、研究目的・方法を提示される。とりわけ「小規模ワイナリー」を、資本規模が小さく、個人（家族）経営が中心で、製造量が少ない醸造所として定義し、規模の小ささそれ自体が観光実践を規定するという問題設定が示される。フィールド調査は2021年5月から2024年4月にかけて、栽培・醸造・イベント参加の参与観察と聞き取りを中心に進められた。

第2章では、ナパ・バレー等の海外事例を参照しつつ、ワインを核に食・芸術・健康体験を組み合わせる観光手法を整理される。フランスでも空中ツアーやアート展示などがみられる一方、日本は試飲や畑見学に体験が集中しやすいという対照が示される。

第3章では、仁木町・余市町におけるワイン生産の経緯、産業支援、観光の取組を概観し、両地域の条件（人口規模・地理・既存観光資源）を踏まえて、ワイナリーの増加と細分化がもたらす含意が示される。仁木町は人口約2,900人の自治体で、果樹産地としての観光基盤を背景に、新規ワイナリーが増えつつある。

第4章では、春夏秋冬の作業サイクルを軸に、栽培・醸造の季節労働と観光受入れの時間的制約が描写され、観光が「余暇」だけでなく生産工程と不可分に組み込まれている実態を明らかにされる。

第5章では、収穫体験を中心とするワインツーリズムにおいて、ホストが労働力確保と観光体験創出を両立させるため、ゲストが踏み込める「舞台裏」を戦略的に整備・調整している点が分析される。ホスト自身が元ゲストである場合、ゲストの願望を先取りし、雰囲気や環境を作り込む。腐敗果の収穫等の過酷な工程は不可視化しつつ、心地よい範囲に労働を限定する実践を、本論文は「綺麗なワインツーリズム」と位置づけ、ゲストの類型や動機とも接続して論じる。

第6章では、池田町の大規模ワイナリーと仁木町の小規模ワイナリーのツアーの比較を通じて、少人数体制ゆえに生産者の顔が見え、哲学や物語が直接伝達されやすい「距離感」が、観光価値を組み立てることが示される。柔軟な進行や参加者同士の交流も、小規模性に由来する特徴として指摘される。

結論では、ホストの戦略と場所性の資源化、規模拡大で失われうる要素（分業化による全体像の不可視化など）を整理した上で、小規模ワイナリーでは、生産者の判断・努力・理念が可視化され、それ自体がブランドの一部として機能すること、親密さが観光資源へ転化することが示される。あわせて、コミュニティ研究の重要性、観光に関与しない生産者の把握、他産地・海外との比較など、今後の課題が提示される。

本論文の学術的貢献は、次の3点に整理できる。1点目は、小規模ワイナリーを対象に、ワインツーリズムを「観光／労働の境界管理」および「舞台裏の可視化・不可視化」という観点から精緻に記述し、ツーリズムが生産過程に埋め込まれるメカニズムを提示した点である。

2点目は、小規模性が生み出す「顔の見える距離感」や物語・哲学の伝達を、場所性と領域性の編成として理論化し、ワインツーリズム研究に比較可能な分析枠組みを与えた点である。

3点目は、大規模ワイナリーとの比較を通じて、規模拡大によって失われうる価値（親密さ、全体像の可視性、柔軟な相互承認）がどのように観光資源化されているかを明示した点である。

また、地域おこし協力隊としての長期滞在を生かした参与観察と聞き取りに基づく実証は、現場の実践知を記録した資料としても価値が高い。

口頭試問では、主に以下の点が問われた。まず本論文における小規模ワイナリーの定義と、なぜ規模に注目するのかが問われた。先行研究が経営論や商品設計論に偏りがちな中で、規模の違いがホスト・ゲスト関係、観光／労働の境界、舞台裏の見せ方を直接左右するという問題意識を確認した。次に、大規模と小規模の本質的差が距離感と領域性の編成として説明され、それが生産者の物語・哲学の伝わりやすさや参加者の愛着形成に結びつく点を議論した。一方で、小規模と大規模の比較に関して、とりわけ池田町を大規模事例として扱うことの妥当性が問われ、行政の政策レベルの動向を追う必要性も指摘された。

以上の指摘はいずれも、本論文の成果があって初めて明確になる論点であり、質疑応答では適切かつ真摯な回答がなされた。本論文は、北海道の小規模ワイナリーを事例に、ワインツーリズムを観光／労働の境界管理と舞台裏の可視化・不可視化の調整として捉え、規模差が生む「顔の見える距離感」や場所性の資源化を比較の中で明らかにした独創的研究である。参与観察と聞き取りに基づく実証も厚く、観光社会学、地域観光研究、食や農業をめぐる文化資源研究に新たな視角を提供する。以上より、本論文は博士（観光学）の学位授与に十分に値すると、審査委員会は全会一致で判断した。